

+ 5 3 【じゃらじゃら・じゃぶじゃぶ】

こんにちでは、そのあたりに蛇がいるなんてことはありませんが、あのころは、あるいはぼくの村では、冬が寒く夏が暑いという常識よりもはるかに、あっちにもこっちにも蛇がいたもんです。

蛇が嫌いなぼくは、蛇を見ると蛇のおばけを連想したものです。

なぜなら蛇のおばけよりも、蛇のほうがずっと怖くて気味悪いからです。

それでも他のおばけにくらべれば、やっぱり蛇のおばけは厭だ。

怖いもの見たさ、自虐精神、嫌いなものでも知れば知るほど、好きになるかもしれない。

なんてことはないかもしれないが、ぼくは懐爺に頼んだものです。

「へびのおばけには、よくであうがのう。まだいちども、であったことのない、へびのおばけを、おしえてくれんかのう」

「蛇はわたしも苦手です。蛇のおばけも苦手です。思い出すのも喋るのも、おぞましい」

「おぞましいたあ、のぞましい、といういみかのう」

「金ちゃんたら。しかたありませんねえ。あまり沢山はしらないのですがね。」

有名なところでは、

蛇鬼【じゃき】

蛇魔【じゃま】

蛇悪【じゃあく】あたりですかね。

知る人ぞ知る、というところでは、

蛇姫【へびひめ】

蛇殿【へびとの】

蛇妾【へびめかけ】あたりですかね。

このさいですから蛇足ながら、

蛇足【だそく】

蛇帯【だたい】

蛇酔【じゃすい】

蛇道【じゃどう】

蛇婆【だば】あたりですかね。

無名なのは、

蛇空【だから】

蛇手【だって】

蛇目【だめ】

蛇妻【ださい】

蛇米【だよね】あたりですかね。

さらに無名なのは、

蛇蛇麵【じゃじゃめん】

蛇亞叉【じゃあまた】

蛇蛇蛇蛇暗【じゃじゃじゃじゃーん】

蛇羅蛇羅【じゃらじゃら】

蛇武蛇武【じゃぶじゃぶ】あたりですかね。

さらにさらに」

なにが沢山はしらないじゃ。

「もうたくさんじゃ。きいてるだけで、きぶんわるくなるのう。それにかいじい、だんだん、いいかげんになつとる。【じゃらじゃら】とか、【じゃぶじゃぶ】とか、ふざけるとる」

ほんとうは【じゃじゃじゃじゃーん】がいちばんふざけているのですが、そのころのぼくは、名曲『運命』を知らないのです。

「いいかげんとは、失礼千万（しつれいせんぼん）なり。それなら、金ちゃん、そのおぼけに、あってみますか」

「【じゃらじゃら】かい、【じゃぶじゃぶ】かい」

「じつはそれは同じおぼけなのです。土の上では【じゃらじゃら】、水の上では【じゃぶじゃぶ】」

というわけで、懐爺の指示どおりに、小川の下流の、いわれた場所に行ってみました。

いるいる、たしかにしている、うじゃうじゃいる。

毒々しい色の、薄気味悪いのが、何匹も何匹も、土手にも川面にも。

土手にいる蛇は【じゃらじゃら】ではなく、がらがら、音をたてている。川面にいる蛇は【じゃぶじゃぶ】ではなく、ぶすぶす、音をたてて

いる。

こりゃ、おばけ蛇ではなくて、毒蛇じゃないか。

ぼくは噛み付かれると厭なので、走って祠まで戻りました。

「こら、かいじい。【じゃらじゃら】ではのうて、【がらがら】じゃ。【じゃぶじゃぶ】ではのうて、【ぶすぶす】じゃ」

「それはまあ、擬音（ぎおん）ですからねえ。擬音は、きくひとによってちがいますからねえ。わたしは【じゃらじゃら】【じゃぶじゃぶ】ときこえたんですがねえ」

「こら、かいじい。あいつらは、へびのおばけじゃのうて、どくどくしいどくへびじゃぞ。あやうく、かみつかれて、しぬとこだったぞい」

「毒蛇なら噛み付かれて、蛇のおばけなら噛み付かれないという保証はありませんよ」

「だども、わしはやっぱり、へびのおばけがよかったのう」

「いえいえ、あの毒蛇たちは、蛇のおばけ予備軍でしてね」

「よびぐんたあ、まいったのう」

「はい。おばけにも蛇にもやさしい金ちゃんだから、蛇もおばけにならなかっただけで、村びとがあゝの毒蛇たちを殺そうとしたら、恐ろしいおばけに変貌するのです」

「どくへびというだけで、じゅうぶん、こわいのう」

「よかったですねえ。おばけに変貌したら、金ちゃんも毒蛇にされちゃいますからねえ」

「そういうことは、はじめにいえや」

ぼくは懐爺にだまされている気分でした。

それでも、蛇のおばけのことをいろいろ勉強したから、まあいいか、と半分満足して引き上げました。